

論語を心の糧として

石井 昔からの古典を最初から大事にする。最初に子供たちに与える文章のなかにも、長い間日本人を育ててきた、そういったもの、定評あるものを早くから与えるということが私は大事だと思っているんです。かりにそのときにまったくわからなくても、いいとさえ私は思います。

たとえば有名な論語などは、いつの時代にも人間の心構えとして、支えになるというふうに考えます。私は小さなときからそういうものを、よくわからなくてもいいから、読んでいる間に心の中で育っていくというような形でもいいから、与えるべきであるということを考えています。

吉田 先生ご自身も四書五経を、小さいときから習ってこられたわけですか。

石井 ええ。

吉田 論語とか儒教的な発想とかいうのは、このごろたいへん悪くいわれているわけですが、それも大事なものの一つだと思うんですけれども……。

石井 私は儒教の精神のなかに、もちろんいまの世の中になくはない重要なものがあると思うんです。それはほんとうに読ん

でみさえすれば、よほど新しい人でも、ああこんなことを孔子は言っていたのかとって、再認識してくれるだろうと思うんです。そういうようなものを小さなときからみんな、持っていくべきじゃないかと思います。

吉田 ただ、やはり日本自身のなかでいろいろ、儒教からはいってきたものもあれば、仏教からはいってきたものもあれば、ヨーロッパからきたものもある。それがどう一体化するのか、あまり明朗で、なにがなんだかわからないというのも困るわけです。そこらへんのところが教育の基本問題の一つでしょうね。しかし、いずれにしても、差しあたり読み書きというのをきちんとやって、脱落者を出さないように、全部の人が読めるように、しかも楽しく読み書きがやれるようにという、石井さんの独特のご発想でこれが実験によってやられているし、実際やって効果があるという形で普及している。

これはやはり日本の教育に一つの大きな提案をされている問題だというふうに考えるわけです。日本の敗戦以来、字をきちんとやることがまずなにより基本だというお考えで進まれてきたことには、たいへん感心させられているし、これからも大いに活躍していただきたいというふうに思っております。どうもありがとうございました。